京都大学附属図書館報

静脩

1970年 3月

Vol. 6, No. 6

The Kyoto University Library Bulletin

# 自然科学系の図書館

楠　　幸　男

京都大学において，たまたま自然科学系の理学部と工学部には部局図書館がなく，各教室ごとに図書室があって図書の管理運用に当っている。これは各学部における研究の性格や研究施設の状況における差違から生じたものであると思われる。そして専門の学術図書雑誌が両学部の各教室で保管されていることは，その利用度の点や研究施設の分散している状態から考えて妥当なものと思う。しかし学生用教育図書が同様に分散しているのは必ずしも適当とは思われない。また，近年における自然科学関係の図書文献の増加は指数函数的であるから，そう遠くない将来におけるその適切な保管運用ならびに膨大な文献探索の能率的な情報処理等については一考する必要があるのではなかろうか。

このようなことから，ここで北部キャンパスに附属図書館の分館として，自然科学系の図書館をつくることを提案し，それに関連した私見を二三記すことにしたい。

一般に，図書館の利用度は距離に逆比例しその必要度は人口に比例するから，早晩北部構内に一つ図書館ができるのも自然であるように思う。では，つくるとすればどのような内容性格をもった図書館を考えるべきであろうか。学生用教育図書の充実とか快適な閲覧室をつくるといったことは直ちに考えられるが，一方それとともに大学の図書館が公共の図書館や資料館と異なるべき点はそれが研究図書館としての機能をもつことである。そしてこの点についてはいろいろの考え方や問題点があるだろう。しかし研究施設の状況ならびに自然科学の進展にともなって将来ますます激増する図書文献の洪水を考えるとき，その図書館が各図書室を結ぶ有能な情報センターの役割をもつということは極めて重要なことと思う。そのためには文献情報や整理事務等に電子計算機の利用を考える必要があろうし，また将来はその活躍が十分期待される。

そのほか，たとえば保管の問題に関連して，各教室から利用度は少なくなったが貴重な図書資料類を移管する場合，その利用度はゼロではないから倉庫にしまい込む式ではなく，必要なときにはそこへゆけばいつでも取出して研究調査できるようにありたい。

ついでながら，私の教室にある和算書は貴重なものであるが十分な保存ができず，シミにかまれ湿気に痛められているので完全看護の要を感じている。

いずれにしろ，将来このような近代図書館を建設するに当っては大学人の衆智を集め，既成概念にとらわれず，外国の図書館の見習うべき点も考慮しながら独自の考えで立派なものをつくるべきであろう。いうまでもなくそのような図書館ができることはその重要な機能とともに，落付いて勉学する環境をつくる上にも貢献するものと思う。2月15日(理学部教授)